回想　一九九二年

後藤　知久
（会員・佐伯市中山区）

昨年の暮、私も古希を迎えた。正直の処、元気で古希を迎えるなど思いもしなかった。

これまで私は六回も手術台に上がった。入院するたびに外科に回され、今無傷なのは手と足だけである。特に二年前、脳内出血で手術を受けた時は、これがもう最期だと思った。その他、戦争では南支那海で米機の攻撃と潜水艦の攻撃に晒され、内地へ帰れば、三月と五月の東京大空襲の洗礼を受け、子供の言い分ではないが、今日まで生きているのが奇跡のように思える。

おかしなもので、こうして何度も死に直面してみて、今思うのは、その時ときによって死に対する考え方が違っていることである。南支那海での場合は、荒れ狂う怒涛の中の出来事で、状況からして針の穴ほどの生きるすべはなかった。そのせいか「死」というものへの恐怖は全くなかった。いつでも死んで行けるという安らぎさえ感じた。

時が流れて、初めて手術台に上がった時は、結婚してまだ間もないころで、（これからやっと人並みの生活が出来るというのに、なんで死んでたまるか）と思った。その後は、いつも思ったのは（まだまだ死なれない。おれには子供がある。この子を一人前にするまでは）と頑張った。ところが、二年前に手術をする時は、勿論場所が場所だったので少しおかしくはなっていたが、それでも（もう、そろそろいいのではないか）と、案外気楽に思っていた。

私の祖父は三日間程寝たまま九十三歳でこの世を去った。そして、両親はどちらも八十三歳で帰らぬ人になった。だから、この分でいけば私は七十三歳までぐらいだろうと、密かに思っている。あるとき、この話を子供にしたら、

「そんならおれは六十三歳か」

と、叱られた。

それやこれやで、死というものは、年を取るごとに素直に受け入れられるものなんだろうと近頃は思うようになった。しかし、こればかりはいざその時になってみなければ分からないものだと思うが、私がそう思えるのは

私なりに精一杯生きてきたからだと思っている。どちらかといえばやや消極的だった私が、四十歳を越えて急に積極的になり、自分のやってみたいことに対して積極的にぶちあたっていったことが、こんな気持にさせてくれているのだと、いつも思っている。

「七十歳」。その年もやがて暮れる。来年は私の干支（えと）である「酉年」を迎える。そこで、この辺でゆっくり今年を振り返ってみよう。

一九九二年冬

今年のお正月は、穏やかな暖かい日だつた。正月といえば、自分の健康のバロメーターとして、毎年尺間登山を床木の方からやっていたが、脳を手術してからはやめているので、今年も登らなかった。それに一月は『議会報』の編集や、『佐伯史談』の集まった原稿をワープロでの仕事も始めるので、お正月だからとのんびりすることも余りない。私にとってはその方がいい。何故ならば忙しいと寒さも忘れてしまうからである。

その今年の冬は思ったより寒くなかった。この分なら桜の開花も早くなるのではないかと、早い春の訪れを心待ちしていたら、ものは思い通りにいかないもので、三月末に急に寒さがぶり返し、おまけに雨の日が多くて、「始めよければ終わり良し」とはいかなかった。ともあれ、私にとっては苦手な冬がこれということもなく終わったのは嬉しかった。

一九九二年　春

雨の多い花の季節。桜もいつの間にか咲いて、いつの間にか散り、気が付いてみたらもう葉桜の季節になっていた。春と言えば、やはり今年は四月十九日の県外研修旅行「日振島と宇和島市の史跡見学」が一番心に残る。

宇和島市は、いわば対岸の町だが、それでいて私にとっては初めての訪問だった。海の旅への多少の不安はあったが、新造の遊覧船の旅は楽しく、船旅への私の不安などふっ飛ばしてくれた。

承平六年（九三六）六月、東国の平将門に呼応して藤原純友がこの島に千余隻のの船を結集して、天慶（てんきょう）二年（九三九）、乱を興したという日振島。そんな歴史上に名を知られた島がこんなに近くにあったのかと、私は島に上陸してまず感じた。

しかし、かっては豊後水道を掌握する要衝の地として栄えたであろうこの島も、今は五百有余人の住む離島。同じ宇和島市でありながら船で一時間近くもかかり、昔の面影もなく、その移り変りに改めて時の流れを感じた

宇和島市。仙台伊達藩の流れをくむこの城下町。遥か都を隔てた四国の外れ。そんな所にこれだけの町がと、私は驚いた。頭の中に描いたイメージと違い、それ以上の何かを強く感じた。（さすが伊達藩）と、同じ城下町であるわが町との比較が頭の中をよぎった。機会があれば、いつかまたという気持が湧いた。

それにしても雨の多い五月。この分だと梅雨が思いやられると思ったが、梅雨に入ると意外に雨が少なくほっとした。しかし、梅雨も後半に入ると雨が多くいらいらさせられたが、梅雨明けは予報通りで嬉しかった。

一九九二年夏

今年の夏は、スポーツに明け、スポーツに暮れたような夏だった。七月の下旬にスペイン・バルセロナにおけるオリンピックが始まり、それが終わったと思ったら今度は八月の中旬から甲子園での高校野球の開幕。

年のせいか月日の経つのが早い。ついこの間韓国でオリンピックが始まったと思っていたら、もう次のオリンピックの開幕である。時差の関係で開会式は日本時間で夜の二時になった。私はその時間に起きて、朝まで開会式のテレビに釘付けになった。開会式への興味もあったが、一つは次のアトランタまでの自信がなかったのでこれが最後のオリンピックという気持を持っていたからもある。

オリンピックの開会式にはその国の顔がある。私達の知らなかったものが顔を出す。それが楽しみで、競技の方はあまり見ないが、セレモニーだけは見逃さないようにしている。先の韓国でのそれは、（この国でどの程度の開会式が見られるだろう）と、韓国の人には申し訳ないがそこそこの期待で見ていたら、これが、思いも寄らぬ素晴らしい開会式で、私は自分の認識不足が恥ずかしくなったものだった。

そして今度のオリンピック。正直の処、私の頭の中にあったスペインのイメージは、闘牛とフラメンコとカルメンぐらいのもの。そのイメージも完全に打ち破られた「色彩と音楽」で統一された開会式に、多くの芸術家を